

次ページへ続く

Continued on next page...

日本漢文学関係資料の調査・収集について

一、調査・収集の範囲と実施上の留意点

日本漢文学関係資料については、日本人の手になる漢文体の文学作品といった限定にとらわれず、日本文化（文学）と中国文化（文学）とのかわりといった広い視点から考えることが必要であると思う。

調査収集の範囲		実施上の留意点	
漢籍	渡来本(唐本・朝鮮本)	江戸時代以前のものについては、狭義の漢文学の範囲に限定せず、枠を緩やかにして収集する。 日本人の手になる注(書き込み)、句読点の付されているものを優先する。 破損(虫くい等)度の高いものを優先。	○江戸時代の刊本については、 一、欠巻のあるものは除く。(零本でしか現存しないものはこの限りではない) 二、同じ刊年のものの重複を避ける。 ○五山版、古活字版
日本人の手になる漢文体作品 (準漢籍)	自筆本	漢文体で記された作品には、宗教関係、歴史関係、地誌関係、法制関係、医学関係、農学関係、教育関係、芸道関係、文学語学関係等広い領域にわたるものが考えられるが、とくに江戸時代以降の作品について、調査収集の範囲をどの程度にしぼるかは、資料館の基本方針による。	自筆本を優先する。とくに江戸時代の諸家の詩文集の場合。
写本	日本人の手になる写本		江戸時代の板本については、漢籍・準漢籍にわたって、カード(図書目録)を整備することが必要と思われる。そのための資料として、京都大学人文科学研究所漢籍分類目録・和刻本漢籍分類目録(長沢規矩也氏著)、その他の目録が考えられる。
板本	日本人の手になる刊本		渡来本については、渡来時の古いものを優先する。ただし、その影響の厚薄、享受史面の広狭を考えて弾力性をもたせる。

現在のところ、フィルム庫に収蔵されているものは不明であるが、漢文学関係資料は少ない。江戸時代以前のもは、さらに少ない。とりあえず、各時代について核となるものをつくる必要がある。核となるものを中心に次第に大きく整備していくことが望ましい。

そのためには、内閣文庫、彰考館、神宮文庫、国会図書館（鶴軒文庫）、蓬左文庫、建仁寺両足院等の漢籍、準漢籍を網羅的に撮影し、核をつくることも考えられる。五山文学関係については、謄写本、影写本ではあっても、史料編纂所の蔵本を撮影することが有効と思われる。

原則的な収集法を縦とし（たとえば、上記の核をつくるための収集）、応用的な収集法を横として（たとえば、調査員の報告等による。資料の利用度、損傷等の配慮等）

個々の図書館の蔵書については、分類目録の存する場合、方斜に従って順位を決定した上、項目単位に撮影する。（蔵本のうち適当なものを選んで撮影すると、爾後の作業が複雑になる。）目録が整理されていない場合、和書のうちに若干含まれている漢籍・準漢籍は併せて撮影する。

収集にあたっての重点の置き方に享受史の視点が考えられるが、この視点からの収集は不統一な撮影に陥る危険があり、十分な配慮が必要である。

収集にあたっての重点の置き方の一つに、海外交流史の視点を加えては如何。

抄物の類については、国語資料として活用されるものに限られる嫌いがあるが、漢文を主とするものも広く収集するのが望ましい。

閲覧室の図書の種類について

I 25	逐翁都行脚	↓ E ?
I 77	国朝詩別裁抄	↓ M ?
E 478	桂川地蔵記	↓ I ?
F 191	訳準開口新語	
F 192	雑 図	
F 127	驥立日記	

（第四室 中川徳之助

昭和五年年度客員教授）

一、近世漢文学の立場から

前年度に中川徳之助教授が報告を出されているが、基本的な方針についてはそれと全く変らない。教授の提案がそのまま実現に運ばれることが望ましいと考える。

ただ、私の守備範囲とする近世日本漢文学に焦点を絞って二・三補足させていただく。

中川教授は「各時代について核となるものをつくる必要がある」といわれたが、近世においてはその核に当るものは、総集・個人作品集を含めた邦人の漢詩文集であると思う。したがって、初期より末期にわたる漢詩文集を網羅的に撮影収集することが先決になるが、そのためには内閣文庫の国書分類目録と国会図書館の「鶯軒文庫日本詩文書目録」を土台にするに便利であろう。「内閣文庫国書分類目録」(上)には近世日本漢文学史を俯瞰するに欠くことのできない作家の作品集がほぼ洩れることなく収まっており、しかもそれが刊行年代順に配列されているから、目録をながめているだけで近世日本漢文学の基本的な潮流が感得される。したがって、これをそのまま撮影収集すれば、基礎的な近世日本漢文学史の資料がほぼ揃うことになり、近世日本漢文学に関する文献の核が確実に形成されよう。中川教授はまた、江戸時代の諸家の詩文集の収集の場合

は「自筆本を優先する」という方針を提案されているが、内閣文庫は昌平校や紅葉山文庫の本を包含しているゆえに、幕府に関係した儒者の自筆稿本の詩文集をも収めていて(例・篠本新斎の文集など)、この点からも教授のうち出された方針を実行するに適わしい文庫といえよう。

ただ、内閣文庫には基本的な詩文集が揃っている反面、近世日本漢文学史の正統からは、はずれている雑書が比較的少ない。こうした雑書を抜きにしては、ちょっとした面白さを持つ本や文学史の空隙を埋める資料が得られなくなってしまふことはいままでもないことだから、雑書の収集をも顧みる必要がある。「鶯軒文庫日本詩文書目録」は、この点、細かい雑書も入っているから、内閣文庫の目録の欠をある程度満たしてくれよう。従って、内閣文庫の書物を基礎として、それに欠けているものを鶯軒文庫で補っていく、という行き方を取っていったら良いのではないかと思う。

日本漢文学関係の資料は、資料館の撮影資料の内でも数少ないものように、閲覧室の写真棚のほんの二・三層をしかかずめていないが、さしあたって以上のような方で充実させていくことが望ましいと考える。

中川教授はまた、収集の基本的方針として「日本人の手になる漢文体の文学作品といった限定にとらわれず、日本文化と中国文化とのかわりといった広い視点から考えることが必要」ということをいわれたが、この見解からいって必要と思われるものが中国白話小説の撮影収集であろう。いうまでもなく、近世の小説、とりわけその主流である読本は中国白話小説から様々な小説の方法や技法を学びとることによって成立し、それは近代の小説にまでいろいろな形で影響を及ぼした小説であった（例えば、近代小説の始源といえる坪内逍遙の『小説神髓』も読本の否定的受容から出発している）。かかる意味において、日本の小説に及ぼした中国白話小説の研究は、決して些小な意味しか持たないものとは思えず、資料館がこの方面の資料をも備えることは、狭くは近世小説の一ジャンルの比較文学的研究からも、広くは日中比較文化研究からも欠かせない事業と思われる。また、一つの公共機関の所蔵資料の充実は、その公共機関を構成する専門家の各自の専門から発するところの意見を実施するという形でなされているのが普通である、という現状を顧慮すると、この方面に首を突っこんでいる自分がこの方面の資料の充填を提案するのも許されるのではないかと思う。

白話小説を最も豊富に備えているのは、関東では東大の東洋文化研究所であるが、その内で日本文学に関係のあるもの、もじくはあると予測されるものを『東大東洋文化研究所漢籍分類目録』に就いて拾い出し、それを撮影することが具体的な方途であろう。いま、そうした書を、従来の研究成果（麻生磯次『江戸文学と中国文学』・石崎又造『近世日本

に於る支那俗語文学史』と私の考えに基いて同目録から抜き出し、参考に供しよう。

警世通言 明王氏三桂堂刊本

拍案惊奇 消間居刊本

石点頭 明葉敬池刊本

晴刻江湖歴覽杜騙新書 明刊本

新鐫出相批評僧尼孽海 清鈔本

欲喜冤家 清山水齋刊本

覺世名言 清刊本

官板大字全像批評三國志 致遠堂啓盛堂同刊本

石渠閣精訂皇明英烈伝

新鐫全像通俗演義隋煬帝艷史

新刻逸田叟女仙外史大奇書

新鐫異説五虎平西珍珠旗演義狄青前伝・後統續像五虎平南狄青演伝

第一奇書 康熙三十四年序刊本玩花書屋藏板闍娛情伝

肉蒲団 宝永二年江戸青心閣刊本

重訂批評繡像玉嬌梨小伝

新刻天花藏批評平山冷燕

貴華堂評論金雲翹伝

麟兒報

快心編初集・二集・三集

紅樓夢 乾隆壬午年序刊本

新編五鳳吟

金石縁全伝

繪像鉄花仙史 光緒十六年申浦石印本

忠孝節義二度梅全伝

金蘭筏

好述伝 同治二年独処軒刊本

新鐫批評出像通俗奇俠禪真逸史

新鐫批評出像通俗奇俠禪真後史

樽杭間評

また、内閣文庫にも必要な書が蔵される。それを「改訂内閣文庫漢籍分類目録」からあげておこう。

古今小説 明刊

醒世恒言 明刊

今古奇観 清刊

二刻拍案驚奇

照世盃

五色石

八洞天

西湖佳話古今遺蹟

天許齋 北宋三遂平妖伝

墨散心齋 北宋三遂平妖伝

李卓吾先生批評 西遊記

封神演義

以上は中国文学であるゆえ、国文学研究資料館としては撮影収集する対象として当を得ていない恨みが存する、と考えられる恐れがあるが、前述したような視野から考えると、撮影収集に意義があると考えられるものである。早急な実現は無理としても、漸次収集されることが望ましいと考える。

読本の名が出たので、ついでにいわせていただくと、資料館にも読本の版本と紙焼き写真は幾らかあるが、他の分野のものと同様、まだ大分不足している。筆者は、中村幸彦氏所蔵の読本の調査と撮影に立ち会う機会を持ったが、同氏は「日本小説書目年表」の読本の部に見える書はほとんど蔵しておられ、したがってその大半を撮影することは、「小説年表」記載の作品の大半を収集することに通じるはずで、これは近世小説の一分野収集の核に相当する事業と見なせる。そのような意味で中村氏所蔵本の撮影の継続は是非行なわれるべきであろうし、またその早急な紙焼き写真化が待たれる。筆者のかつての経験では、金沢や盛岡の文庫の、どこにも存するポピュラーな本の調査を命ぜられて、そうしたポピュラーな本をわざわざ地方の文庫に就いて調査することの意義に疑問を感じたが、中村氏の所蔵本のそれは、国会図書館や学習院大を除いては一括して見ることの難しい読本をまとめて収集できるといふ意義を踏まえてのことであって、やり甲斐のあるものであった。

そこで考えてみるに、近世小説の内の読本というジャンルの一括的な

収集、というのに類した収集法が各ジャンルでなされると大層有効的であろう。つまり、ジャンルごとに一括して収集するという方法も存在している。現在の収集法は、各文庫ごとに収集するという形のものを見うける。文庫には雑然とした収書がなされた所と系統的な収書が行なわれた所とがあるわけで、後者の方にはあるジャンルのものがかなりまとまって集められている場合がある。その場合には文庫の収集がそのままあるジャンルの一括的な収集に通じることになるが、しかしそう好都合に運ぶ所ばかりとは限らない。文庫の収集は、あるジャンルの一括的な収集につながらないことも多い。これを補うために、読本における中村氏の如く、あるジャンルを一括所蔵している方や機関を選び、それを一括撮影するという方法が実現されると、資料館の所蔵する資量が比較的短期間に質量ともにかなり系統的にまとまる、ということにならないだろうか。いうは易く行は難いが、こうした方法を考えてみることも一つの試みであろう。

以上、自分の狭い専門範囲のみから物をいい、資料館の全体に通じる大きな問題の提起はできなかった。現在の調査カードが漢籍の調査に適したものであるかどうかの問題、付随しての調査要領の改訂等が検討されるべきであることや、また、少なくとも和刻本は調査収集すべきであるが、その具体的方法について確立を急がねばならぬことも併せて提言し、一年非常勤講師として通った際の感想の一端を述べた。